

論文の内容の要旨

論文題目 スピノザの方法

氏 名 國分功一郎

スピノザが『知性改善論』の中で提示しようとした方法〔methodus〕とは何かを明らかにすることが本稿の目的である。

本稿は三部構成となっている。各部について、議論の流れを紹介した後で、その内容要旨を提示する。

【一】

まず論文全体の議論の流れを紹介する。筆者は次のような道筋で論述を組み立てた。

第一部

最初に『知性改善論』における、方法についての説明を細かく分析した。そもそも、スピノザの方法の何が問題であるのかを明らかにしなければならなかったからである。すると、その分析を通じて、この方法がもつ奇妙な性格、すなわち、それが、方法であるにもかかわらず、方法としての役割が果たせないように思われるという逆説が明らかになった。スピノザの方法

の解明は、スピノザの方法を巡る逆説の解決として定式化された。

第二部

スピノザの方法は観念の獲得・導出に関わっている。それは観念を適切に獲得・導出するための方法である。しかし、これまで、この方法を論じてきた論者たちは、実際の観念の獲得・導出から離れて、この方法を論じようとしたのだった。そこで、筆者はまず、スピノザの観念についての思想を明らかにする必要があると考えた。さらに、『知性改善論』の分析より、スピノザの観念思想がデカルトの観念思想の乗り越えとして構想されているという目算が立てられた。そこで筆者は、スピノザがデカルトについて書いた書物『デカルトの哲学原理』の分析を通じて、この課題に取り組むこととした。

第三部

『デカルトの哲学原理』の分析より明らかになったのは、スピノザがデカルトの観念思想を、表象論的な観念思想としてとらえているということ、そして、そのような観念思想に大きな疑問を感じていたということであった。この疑問をヒントに、再び『知性改善論』の読解を試み、スピノザの構想する観念思想が、どのようにしてスピノザの方法の逆説を解決するものであるのかを検討した。スピノザの方法は、スピノザの観念思想そのものである。最終的にはそれが『エチカ』の体系において実現される。同書第一部冒頭の分析を通じて、『エチカ』という書物が、『知性改善論』の抱えていた矛盾を乗り越えて、どうやってその方法を実現したのかを最後に明らかにした。

【二】

続いて、各部の内容要旨を提示する。

第一部

第一部は、『知性改善論』においてスピノザが提示しようとした方法に、いかなる問題が存在しているのかを明らかにしている。

スピノザは、方法探求の根幹に、無限遡行の問題を置いている。これは次のようなものだ。方法の探求には、方法の探求のための別の方法が必要である。だが、この別の方法を探求するためにも、さらに別の方法が必要である。こうして方法の探求は無限遡行に陥る。しかし、当然ながら、これでは方法が手に入らないから無限遡行に陥ってはならない。方法の探求において、無限遡行は避けられないが、避けねばならない。

この課題はまず、方法を巡って現れる道具の形象によって与えられる。精神は道具を必要とする。だが、道具を作るためには道具が必要である。さらにその道具を作るためにも道具が必要である…。ここに無限遡行が現れる。では、この無限遡行をいかに回避するか。

無限遡行を禁止するため、スピノザは、方法を巡るもう一つの形象に言及する。それが標識である。精神の必要とする道具とは、具体的には観念のことだが、この観念の正しさを真理の標識によって得ようとしてはならない。真理の標識を得るためには、真理の標識の真理性を明かし立てる別の真理の標識が必要になってしまうからである。

ここに、スピノザの方法を定義する三つ目の形象が現れる。然るべき順序で観念を獲得していけば、獲得された観念の真理性が疑い得ない、そのような観念の連なりとしての方法、すなわち道としての方法である。方法は道であるというのがスピノザの方法の定義である。

だが、ここに言われる道とは、精神がたどった跡である。あらかじめ道を示すのであれば、無限遡行に陥るのは明らかだから。道としての方法は、精神の活動に先立って存在しない。すると、ここに大問題が生ずる。この方法は、精神の活動を指導することも、制御することもできない。本稿ではこれを方法の逆説と呼んだ。

さらにもう一つの逆説が出てくる。方法が精神の活動に先立って存在しないなら、そもそも方法についてあらかじめ論じることができない。つまり、方法論という企てそのものが疑問に付される。これが方法論の逆説である。『知性改善論』は方法論だが、そこに説かれているのは、方法論という企てそのものを否定する方法である。

スピノザの方法にはこれら二つの逆説がまわりついている。スピノザの方法の解明は、二つの逆説を解決する試みとして継続された。

第二部

第二部では、論述の対象を変更し、スピノザがデカルトについて著した書物である『デカルトの哲学原理』の読解を通じて、上の課題の継続を試みた。(1)スピノザの方法は、徹頭徹尾、観念に関わっているので、スピノザの構想する新しい観念思想の有り様が分かれば、逆説は自ずと解決するのではないかと思われたこと。(2)第一部での『知性改善論』の分析により、それを構想するにあたってスピノザが、デカルト哲学を乗り越えの対象としていると思われたこと。以上がその理由である。

だが、同書は、スピノザが自らの思想を思いのままに語ったものではなく、デカルト哲学を独自の仕方で再構成したものであるため、その読解は一筋ではいかなかった。まずは、この本をどう読み、どう位置づけるかという問題が取り組んだ。

分析を進めた結果分かったのは、スピノザの再構成は、デカルト哲学を首尾一貫した体系にすることを目指しているのだが、その際に、デカルト哲学から確かに引き出すことはできるも

のデカルトが実際に口にしたわけではない論理、いわばデカルト哲学に潜在する論理を用いているということである。

この潜在的論理は、デカルト哲学の顕在的な内容と競合することすらあった。その主要な争点の一つは、デカルト哲学を貫く説得の要請である。スピノザによる再構成は、デカルト哲学が自らの課題としていた、懐疑論者（および懐疑してしまうデカルト本人）の論駁と説得とを、完全にそぎ落としてしまっている。スピノザによれば、説得の要請は、デカルト哲学の体系にとって余計であるばかりか、その体系的完全性を損なうものですらある。それはスピノザの真理観とも合致した。スピノザは、真理を獲得したものだけが、真理の真理性を理解できると述べていたからである。真理を獲得していない人には、真理の真理性を説明することはできない。そこでは説得は何の役にも立たないのである。

以上をもとに読解を進めた結果、デカルトが観念を表象と見なしていることへのスピノザの疑問が浮かび上がってきた。観念を表象と見なすとは、観念の原因を実在する事物に求めるということである。表象論的観念思想からの脱却が、スピノザの構想する新しい観念論の方向性であると予想された。

第三部

脱表象論的観念思想、それは一般に平行論と呼ばれるスピノザの思想と一致する。それは、観念の原因を事物に求めず、ただ他の観念にのみ求める観念思想である。平行論の考え方でいけば、我々は、諸事物の連結に完全に対応（平行）する諸観念の連結を形成することができる。

これは『エチカ』における神についての考え方によって基礎づけられている。すなわち、神とは無限に多くの属性を有する実体であり、事物と観念は同じ一つの実体の変状に他ならず、その変状が延長の属性において捉えられれば事物と、思惟の属性において捉えられれば観念と呼ばれる、そのような考え方である。

方法の逆説の解決は、ここから得られた。知性は観念の連結を形成し、この観念の連結は一定の法則をもって行われる。したがって、確かに知性はこの連結を形成するのだが、この連結自体が法則に基づいて行われる。しかもこの法則は知性に内在する法則である。いわば、知性の活動を知性が制御・指導するのである。

ここから方法論の逆説も解決されることとなる。というのも、知性は、観念を獲得するにつれて、自らに内在する法則をも同時に理解していくことになるからである。方法論とは一般に、いかなる方法が用いられるべきかを、方法の実際の適用に先立って示すものである。だが、スピノザの方法においては、いかなる方法が用いられるべきか、つまり、いかなる道が歩まれるべきかが、方法の適用と同時に示される。すなわち、知性が、観念を獲得していきながら、自らで自らに対し自らの歩むべき道を示すのである。

かくして方法および方法論の逆説が解決された。残る問題は、この平行論を可能にする神の観念が、『エチカ』において、いかにして獲得されるのかを検討することであった。ここには、起源・原理・基礎についての議論一般が直面する問題があった。すなわち、神の観念はあらゆる事象の起源であり、原理であり、基礎であるが、この観念が直ちに与えられるのではなく、何らかの手順によって獲得されるものであるならば、その獲得のための手順は、別の起源なり原理なり基礎に属していることになる。無限遡行の回避という課題がここでも現れるのである。

この課題をスピノザは、実体の系譜学によって乗り越えた。実体という原理の論理的な構成を一定の仮定に基づいて証明していくことで、この原理そのものの構築を目指し、そしてそれが構築されるや、今度は構築された原理それ自体によって、最初の仮定を廃棄する。すなわち、仮定されていた内容の正しさを証明するのである。それと同時に系譜学は必要なくなり、今度は構築された原理、すなわち神の観念からの諸様態の発生が描かれる。知性は、系譜学によって、諸様態の発生に追いつき、それと一体化する。

スピノザの方法は、知性自らが自らに内在する法則を理解していくことそのものである。したがって、最終的にはそれは教育に結びつく。スピノザの方法の概念は、スピノザの教育の理念であるというのが本稿の最終的な結論である。